

ままならぬ

市川茂子

短冊に今の願いを一つ書き吊るす竹の葉萎えてゆくなり  
大空に君の手を取り飛び立ちて天の川に入る明け方の夢  
命とはかくなるものか年重ね安きにありて目覚め危ぶむ  
起き抜けにテレビつければコロナ禍の感染の数テロップに出る

時早く過ぐとう詩人ならずとも老いゆくわれの時はいつまで  
葱一本買い足す独りの夕餉にてスキヤキモドキと眩きながら  
消費するくらしを時に疑いて自給自足の昔を思う  
ケーキなく手近にわが家の赤飯で祝う今年の彼女の誕生日  
ままならぬこの世と<sup>モノローグ</sup>思う独白を空に放ちて八月を過ぐ  
路地裏に高く伸びたるさるすべり真紅の花をかかげて静か